

ても、父と兄は何処で戦っているのか消息はわからない。ある日暮時、突然兄が訪ねて来た。最初は戦場から逃げて来たのかと母は家の中に入らず、垣根の内と外とで話をしていたが、高田方面の戦に敗れ、明日未明にお城に入り戦う事になっているとの話と、この家の主人の取りなしで、やっと皆に逢う事が出来た。

イネは兄に逢えた事がどんなに嬉しかったか。大人達は一晩中語り合い、まだ暗い中兄は出て行つた。やがて会津藩は降服し、その後色々あったらしいが、ただ一つ兄の後日談として、暗い中大川を泳ぎ渡りお城に向かったが、途中敵兵が彼方此方にいるので、

五、六人の隊士で或るお堂に入った。するとお堂の下から女のひそひそ声が出て「もし会津藩の方だと思いますが」というので「そうだ」と答えたら「戦況はどうでしょうか」と聞くので「よくなく吾々も未明に入城し籠城して戦うつもりだ」というと「御武運を祈ります」と話は絶えた。朝早く出発の時お堂の下をのぞいてみたら、十七、十八才の武家の娘ばかり七、八人扱きで膝を固くしぱり、懐剣で左胸の乳の下を突き声も立てずに見事に自害していたとの兄の話だった。

敵の恥しめを受けぬ様に、又武士の足手まといにならない様にとの本当に会津武士の娘達だったが、この事はあまり人に知られていないしそれが何処のお堂とも私も聞いていないと祖母イネは残念がつていた。そのお堂は一体何処なのだろう。私はその事も知るのも目的で会津大学に入った。会津の事や戊辰戦争の話の時には、必ず出席して、講師の先生にお尋ねしたが、「わからない」とおっしゃる先生。「又そんな事実はない」と断言される先生。「おぼんちや、又今日も駄目だった」と実家の方に向かって報告する私。しかし遂に平成六年高田大学の会津に関しての講師だった宮崎十三八先生の時、担当の三本松先

生のお許しをいただいてお聞きしたら、「集団自決は門田の一族と、それから西若松駅の東側の少し入ったお堂だよ」と事もなげにおっしゃった。私は本当に驚いた。

七十五年位前、会津高等女学校一年生の時、汽車通学をしていたが、通学路から少し入った藪の中にボロボロの障子の古いお堂があった。気味悪くて友達に誘われても二度と行かなかった。「先生、昔ボロボロの障子の」と聞いたなら「そうだ。今は家が周りに建つてね」とのお話に、祖母が死んで五十二年でやっと念願が果たせた、祖母との約束が。私は胸が一ぱいになって、先生にお礼を言つて家に帰る途中涙がこぼれた。先生に後光がさした様な有難さだった。ところが間もなく先生が亡くなられた事を知つて、とても驚くと共に悲しく残念だった。もっともつと祖母から聞いていた事が沢山あったのを確かめたい思いもあつたのである。

戊辰戦争で幕府の直轄地の上戸原にあつた私の実家でおきた話で、長州兵の略奪や暴行のすごさに、大事なものをそつと隠そうとした若い奉公人が切り殺された。それを物陰からのぞいてみていた祖父秀吾の弟良吾十一才と妹おりよう十三才が、息子や孫に語り伝えていたし、私の祖母も嫁に来てから聞いたのだと思う。奉公人迄殺されて、一徹者だった祖父福田彦九郎が抗議でもしたのだろう。隊長のいる赤留村に行く街道より少し右に入つた草原で通称馬つくりの場（馬の蹄鉄をはめる場所）に引立てられ、殺される事になった時、後からついて行つた曾祖母ヒデが隊長の前に進み出て「この者は、他家の生まれ私の家に入った者、全部の責任はこの家に生まれた私にあります。私を切つて下さい」と言つたら「さすが肝煎の家に生れた女だ。お前に免じて許してやる」と言われ彦九郎は助かつたという。